

国立大学法人愛媛大学 令和3年度研究報告書

研究成果（概要）

本事業では、概念型カリキュラムの考え方を取り込んだ概念駆動型読解モジュールを開発し、児童が地域課題に主体的に取り組みながら読解力を高めることを狙った取組を進めた。事業の成果としては、真正の学びに埋め込まれた読解力育成のための学習活動モデルの提案、テキスト教材の作成、地域との連携体制の構築、概念駆動型読解という枠組みとそのアセスメント方法の開発が挙げられる。今年度は少人数を対象にして根拠資料を収集し、学習活動モデルのフィージビリティと効果の質的検証を進めた。概念駆動型読解の導入による学力向上の効果として（１）参加児童が「実験計画の立案」「動画作成のための展開構成」「イベントプランニング」等の高次な活動に取り組むことができたこと、（２）それに関連した家庭で継続的な学びが行なわれたこと、（３）概念駆動型読解を教えていく上での課題が明確になったこと、の３点が特に成果として挙げられる。

1. 研究課題と調査・取組内容

（１）具体的な研究課題

教科横断プロジェクトを通じた言語能力の育成とその効果検証

（２）研究課題に基づいて実施した調査・取組内容

愛媛大学教育学部附属小学校の協力の元、「土曜学習」において児童が主体的に地域課題に関連したプロジェクト学習を進めながら、その活動に必要な知識技能の修得や表現等に密接に関連した読解教材を読み解く活動を織り込んだ。これらの読解教材の多くは既存のニュース記事や学校で学習する内容を元に全面的に書き直すことによって作成されたものである。

本取組では、子どもや地域の関心が高まりつつあるプラごみの削減をテーマに土曜学習の参加者を募り、児童6名（6年生1名、5年生1名、4年生4名）が年間を通じて、読解活動を含む様々な子ども主導の地域活動に取り組んだ。また、本取組を中心的に進める大学教員に加えて、小学校教員を志望する3・4年生の大学生約7名が授業実践に参画するボランティア及び教材作成を支援する学生補助員として参加した。

現時点では、この読解活動を含むひとまとまりの時間を、「概念駆動型読解モジュール」と呼び、読解教材の「中心的概念の理解」と「中心的概念の一般化」を中心に、必要に応じて読解方略の教授を含める45分間の授業としてモデル化している。

本取組は、この読解モジュールと組み合わせるかたちで「プラごみ関係業者へのインタビュー」、「生分解性レジ袋の商品評価実験」、「動画作成を含む校内での広報活動」、「ニューヨーク市でプラごみ削減に取り組んだ児童を追ったドキュメンタリー映画の上映会のポスター作成・司会進行・アンケート作成」等を進めた。

以上の取組を通して、子どもの主体性から地域の課題に関連付けられたオーセンティックな学びを構成するための学習モジュールのあり方、地域との連携のあり方、概念駆動型読解という新しい読解力の捉え方を具体化することができた。

2. 効果検証内容・結果

(1) 効果検証のための指標

No.	検証のための指標	実施主体	具体的な検証内容
1	概念駆動型読解カテゴリーブック	愛媛大学	個別のインタビューによって、当該読解資料を一般化可能なかたちで理解しているかを問い、それを本カテゴリーブックで評価した。多くの児童は一般化可能な形で文章を理解したが、その一般化の範囲が狭いことが課題として明らかになった。
2	タブレット上での読解活動時間	愛媛大学	土曜学習が実施されていない日でも、活動に関連した資料を検索していることが、操作ログにおいて確認された。
3	活動に関連した読書時間	愛媛大学	自己評価アンケートによって児童主体のプロジェクトテーマに関連した資料等を読む時間について尋ねた。ほとんどの児童が毎週何らかの形で関連資料を自発的に読んでいることが確認できた。

(2) 指標に関するデータの取得方法（時期、回数等）

	検証のための指標	データ取得の時期、回数等
1	概念駆動型読解力測定インタビュー	令和4年3月、1回実施
2	タブレット利用ログ	年間を通じて継続的にタブレットの利用ログを収集
3	参加児童アンケート	年間を通じて約20回実施

(3) 検証の際に比較の対象とする学校等

取組実施校	比較対象校	比較対象とした理由
愛媛大学教育学部附属小学校	なし	今年度は学習活動モデルの構築に専念するために比較対象を設けていない
計1校	計0校	

3. 考察（本研究が学力向上のために有効な取組であると言えるか）

今年度の取り組みは、子どもの主体性を基盤としながら、地域の課題に関連付けられたオーセンティックな学びが、土曜学習という課外活動の時間を利用して学習活動モデルを示すことができた。この学習活動モデルは、無論、読解そのものではないが、今回提案する概念駆動型読解は、子どもが主体性を持って学び、それを地域の人びとが支えるという周縁的な文脈が構築される中で初めてその意味を持つ読解のあり方である。その意味で、読解のみならず、子どもが地域課題に主体的に取り組む活動全体を学習環境としてデザインすることが欠かせない。

概念駆動型読解を含む地域課題への取組を進めたことによる学習効果としては、(1) 実験計画の立案、動画作成のための展開構成、イベントプランニング等の高次の活動に全ての参加児童が取り組むことができたこと、(2) それに関連した家庭で継続的な学びが行なわれたこと、(3) 一般化可能なかたちでテキスト教材を読解したことがインタビューにおいて伺えること、の3点が挙げられる。(1)については、活動記録に含まれる児童の発言や制作物として確認できた。(2)については、タブレット利用ログとアンケート結果がそのエビデンスとなるデータであり、現在分析を進めている。(3)については、概念駆動型読解力を測定するためのインタビューを実施した

結果、参加児童らが一般化可能な理解をしていたことが明らかになったが、同時にその一般化の範囲が狭いことが明らかになった。

4. 課題と今後の研究の方向

今年度の取組に関する課題と来年度の方向は以下の通りである。

1) 対象児童の拡大：上記に示した効果は、特定の小学校のわずか6名の児童についてのみ得られたものである。そのため最も大きな課題としては、来年度において他の複数の学校等において、今回開発した学習活動モデルを用いた実践をおこなうことである。

また、愛媛大学教育学部附属小学校においては、今回土曜学習として実施した課外活動としての読解モジュールの実践に加えて、社会科等を中心として、現行の教科書に準拠した読解モジュールの開発をおこなう予定である。

2) カリキュラム設計：今年度は子どもたちの主体性を育むことに主眼を置き、あらかじめ授業を設計することは最低限に留めた。しかし、今回理論的な枠組として採用している概念型カリキュラムの考え方に基いて設計するならば、単元計画をおこなっていく段階より、活動全体を通して理解してほしい大きな概念（ビッグアイデア）を想定し、その理解を促進するための本質的な問いを設定するという順序で進める必要がある。今年度の取組では、参加児童の概念的理解における一般化可能な範囲の狭さが課題として残ったが、これは上述のビッグアイデアと紐付いたカリキュラムが用意できていなかったことに原因があると考えられる。来年度開発する学習活動モデルでは、その点を踏襲して、学ぶべきビッグアイデアから逆向き設計でカリキュラムの設計をおこなう。このことは課外活動型と正課活動型の両方の学習モジュールにおいて重要である。

3) 教材のオンライン化：読解教材は現在のところ、Microsoft Word または PDF の電子ファイルとして作成しているが、今後、より関連した記事への読解活動の広がりを促進するために、ハイパーテキスト化をおこない、ウェブサイトで公開された状態で教材として活用できるように変更する。これによって、関連記事等への学びが促進されやすくなると考えられる。

5. 今年度の研究経過

月	内容
5月	各種学内での調整、ボランティア・アルバイト学生の確保
6月	土曜学習実施
7月	土曜学習実施、第1回学力向上推進協議会開催
8月	第2回学力向上推進協議会開催、漁協とプラごみ再生業者への遠隔インタビュー
8月	第1・2回概念型カリキュラム学内勉強会
9月	土曜学習実施
10月	土曜学習実施
11月	土曜学習実施
12月	土曜学習実施
1月	土曜学習実施
2月	地域教育実践交流集会での発表、土曜学習実施、自主上映会開催
3月	土曜学習実施、第3回学力向上推進協議会開催

6. 研究関係者

(1) 学力向上推進協議会構成メンバー

所属	氏名
淑徳大学	御手洗明佳 准教授
灘中学校・灘高等学校	井上志音 教諭
早稲田大学本庄高等学院	赤塚祐哉 教諭
筑紫女学園大学	稲田八穂 教授

(2) その他関係者

所属	氏名
一般社団法人コミスクえひめ	西村久仁夫 代表理事
松山市立味生第二小学校	高岡遼介 教諭
NPO 法人 NEXT CONEXION	越智大貴 代表理事